輸血を受けた方々・血漿分画製剤を使用した方々の声

女優
友寄　蓮　さん

お芝居を始めたのは中学の部活。高校生になっても演技をすることが好きでレッスンに通っていました。そんな高校2年生の秋に「急性リンパ性白血病」と診断されました。

治療中は身体的のみならず、気持ち的にもつらかったです。薬の副作用で、髪の毛もまだらになって抜けていくし、顔もむくみ、外見が変わってしまって。そんな中、支えになったのが担当医や看護師さん。治療のみならず、節分のときは看護師さんが鬼の格好をしてくれたり、クリスマスは研修医の先生がサンタクロースの格好をして病室をまわってくれたり。何より、母はずっと一緒に付き添ってくれました。

そして多くの輸血にも支えてもらいました。輸血前は具合が悪くて意識が遠のくほどふらふらしてしまっていても、輸血を始めるとだんだん体全体が温まってきて、頬がほてるのを感じるんです。「あぁ生きているんだな」って実感がありました。

私の体にめぐっているものって、100人以上の方の好意、優しさです。みなさんが献血してくれるおかげで私たち患者はこうして元気に今生きています。

熊谷　知香　さん

中学3年生のときに、急性リンパ性白血病を発症。抗ガン剤治療がはじまると、髪も抜け落ち、激しい頭痛で起き上がることもできない状況に。そんなときにはじめて輸血を受けました。「輸血をすると、ただ単に血液の数値が上がるだけでなく、私の場合は心まで元気になれました。みなさんが献血してくださった血液には、確かに誰かの命を救うことができる力があります。どんなにつらいときも未来を信じて頑張れたのは、私の体の中でずっと支えてくれたみなさんの献血のおかげです。」

三澤　恵利子　さん

はじめての出産の際、準備万端で臨みましたが、医師も驚くほど突然の大量出血により輸血を経験しました。みるみるうちに手足が真っ白になり、パンパンにむくんでいき、半袖でも暑くてしかたないくらいの気温だったはずなのに、気づけば「寒い、寒い」と連呼していました。私にとって献血とは、文字どおり、血の通ったあたたかい贈りものです。あのとき、輸血用の血液がなかったら、私の手は冷たいまま。生まれた子の頭を撫でてあげることもできませんでした。いわばこの子は、みなさんの愛によって生まれた命。いろんな方の優しさとぬくもりに満ちた大切なプレゼントなんです。

息子が3才のとき川崎病と診断され、グロブリン製剤を点滴してもらいました。

今ではとても元気な野球少年です。

いつも元気な息子がうなされている姿を見ると、本当に気が気ではありませんでした。

献血をして下さった方々にはとても感謝しています。

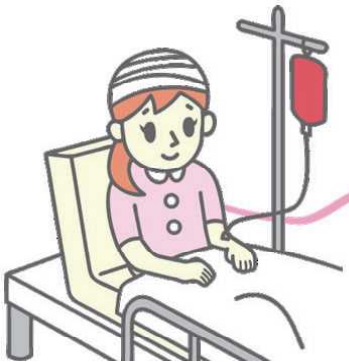
献血がクスリになって治療に役立つことを知り、今まで以上に献血の必要性を感じました。

（戸井田　海音（といだ　かいと）くんのお父さん）

私の姪は3歳の夏に突然の髄膜炎で死の淵をさまよいました。

小さな命を救ったのは、献血から生まれた「免疫グロブリン」という血漿分画製剤でした。

献血をしてくださった方々の善意のお蔭で、姪は幼児教育を目指すバスケット好きな元気で優しい学生へと成長できました。

献血を取り巻く多くの方々に、心から感謝しています。

（小野 玲子さん（伯母））